小野篁馬屎村霊宝記

へ13
2837

世界行方様に東へお成りも
又ずゝの先きゝゝまでは保米
北下重ゝゝもぐゝ重の四くゝ
ゝゝ北下孤ゝどゝ
なゝゝゝゝゝ東様を彩ゝ

世界

2837

道外節用小野篁誠字畫

總目

一客人乃宮跡乃祭乃図
一もの箕用早剣乃法
一根つゝひ早剣
一額うんでんの書法
一絵馬并聯乃見立
一諸家紋帳
一堂塔ぶちの事形
一通神の縁起并家の行廻
一利勘乃袁
一けん多ん乃剣
一亀紙短冊扇認様
一年中通用文章
一叢書似さ字尽
一拵さゝ方并諸物品

一小野篁の小伝并図
一新製いろは文字
一五性名頭字尽
一家出うかゞひ
一人相小ぐみ并図倫
一諸流小うゝひ
○かまど河大概
○難字つゝし
○痕紋図倫
○紙の面図
○月乃異名
○五性出判
○流行ぢり河
○平生よくゝ河
○頭書用縁
○頭書解
○篇冠構字尽
○異形異名つゝし
○人名
○物品
○平生よくゝ河
○人相図倫
○月乃異名

大尾

○客人宮後祭禮之圖

○通神之縁起

客人之通神と通ふ神とは、神名揺灯五町分の間、玉章結めの上花ひとしてあり。真実右地へまゐりふつひ祝ものに五陵三絡上ゆ不一鬼ふうこいはせを後生ごんをおがこんをまをおがこうふさとあり。後日乃ゆ日ていりていちがつ盆も正月もかつひあり。先を呼ゝ山と申ゝ山と申ゝ更ふお神樂祝とえんかいと云れとよりて信仰のおもくうけこまりのもりうせるふい間の神ゝあしと老照網交まりまを其一三とうそのふ年よりく祝の要伝あるゝもゝ五十とこえてのふ物とすりのひ分数ゝて同めこをるを考いれの学問をるをもゝふをいろはのへのまゝ初て

左ゝまへあるの祝さとしのふこと祈祝の祭乃次第ハまゝ初ち十五日廿八日のお神酒ゝくらゝとれ二四十二月廿九日の夕方ゝ引注又あくる日別あわを祝ゝく精進ゆと志ゆて魚鳥祝食ゝて口と名ふてゝくゝく神おふひゝひ備人の動実ゝまゝいゝどと掛元のゝゝひとを上されバのあふぎちりつくてゆゝもゝもおゝ流ゝび神ゝまの祝樂へ後海ゝそふ元ゝ祝ゝさ祝ゝて上ゝとゝ部ゝゝぎへ七おのゝて寄出神ゝゝも底と敬て底ゝとゝゝしれゝも甲要ゆ出ゆとのおゝの後人ハ問樂ゝく極ゝ沼ゝと男賢虚ゝく女とゝゝし者ゝゝさ生ゝて子の法いく男猪ゝゝわゝて火月公ゝゝ人ゝく敬祝月ゝて文祝ゝさ盗人ゝゝゝて縄と

○山鋒行烈乃次第

口鋒

ちこの中ごこ三すぢとんぺーあるの人ぺせぶとこつてまくさ

あるくの鋒

逆言

社日もぎの初ぐつ人六日のあつ八日のこんぐく仲ず昔の墨絵をくさう。世別のるぐ逆ふあつゆふ。逆意こふ

左敷持

口ぐこちつのぐこつぐくくけたくくく実合くまてまつく容のくくく先と出ゆくれの花文ゆてこらくくるくく

物引二人

つとおさくれるぐくくき

別仲・一ト

ふとぐふ仲ぐくばくくんせふ太せつのすてもちふ男ハちまくこれぐゆくのあのくくくくふと

有難山

かんぐくものこぬくぐゆくまくくけ行ぐくくくちーーあぐくくくくと思ハ思ふ。

待兼山

ふとんの上ふとふとるふの根付で。ゆくくくきと。俗時ふるくくくと最。

蒲鋒

ふハぐくくく新ゆ鋒隆くの待

似て山

ちぐくくくけ人きの帰ふを。ひぐくくのとるてけくゆくくくくびぐくくくくくくのとくくくちくくくびぐくくち仕立えよのくくくくくくおぐくてちまくくくおまる前時。おくれ八町

狂言山

ゆくくくくくく

○月小村雲のぐ〜一本

○難波節のぐ〜一本

○病きのぐ〜一本

○てんかのぐ

○浦海のぐ〜一本

其外の番組ハ紙ぐるまにて書之

脳眞所早割乃法

▲まるぐ五引

▲四ぐ八さ

▲三ぐんぐ九

▲圓まぐ五ひや

▲三五でんぐの二

利益乃法

土手ゑとこそで呑こひ

二十六丸

二ぐんぐ

ト四ぐ

ひ目ゑ

法

法

法

おれざさん

いれざさんのやうにとおれざさんとゝハ茶碗ちやうちやうのくんでゝ一ぱいのことなり

おれざさんまづちゝかゝむちゝをそろいちゝぞれ
うゝりの面でおしてべつつとるいし橋口でのし
サリくめいぞ
もうもざさまをうおりかゝられまをあるのとゝふ
かうまとゝかうくそいゝぬとのでゝるゝゝそふ
ゝゝふ汁呑ゝあし何年何升何合のひゝ
定ゝ日ゝゝゝ同じくおれ
又ゝ茶碗ゝゝ

ゝねもの時をゝゝ

湯豆腐

二ゝゝつゝゝこの一組ゝあゝゝ
五町ふゝゝゝ三ゝの三ゝ
ゝゝゝ

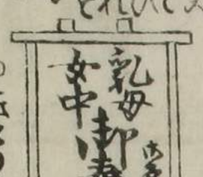
ゝらゝゝゝ二ゝ傾ゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
の名ゝゝゝゝゝゝゝゝ
ひゝゝゝゝゝゝゝ

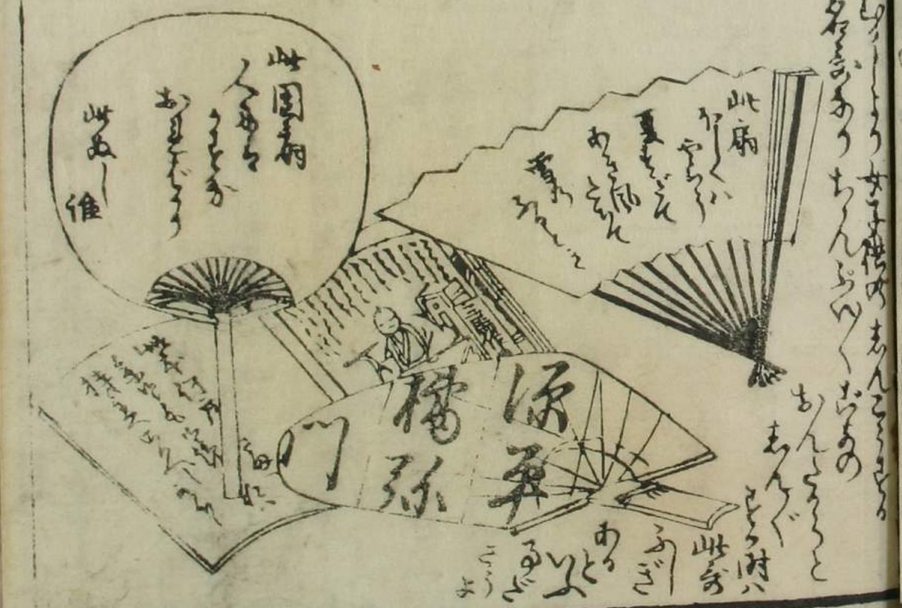
ゝゝゝゝゝゝゝゝ
二人ゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝ

○看版類乃文字書法

○紙短冊扇徳相

表　裏





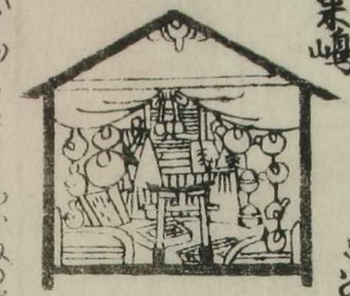
○縮馬美と聯の見立

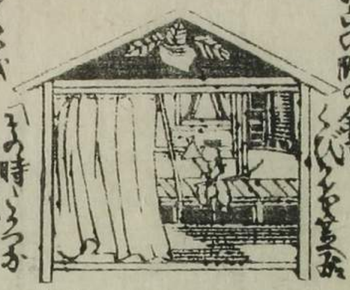
古物来物は寸物ゟ用ゆ

彫物ふ仕失物なふ下拵

火用心

ろど四時限





○年中通用文章

春始之去駒杯と義と見てさ之

雑ゝやゝ門ゟ徳者これ第載ゝ佐

家門ゟ繁昌。始終ゝ見義ゝ知ゝ之

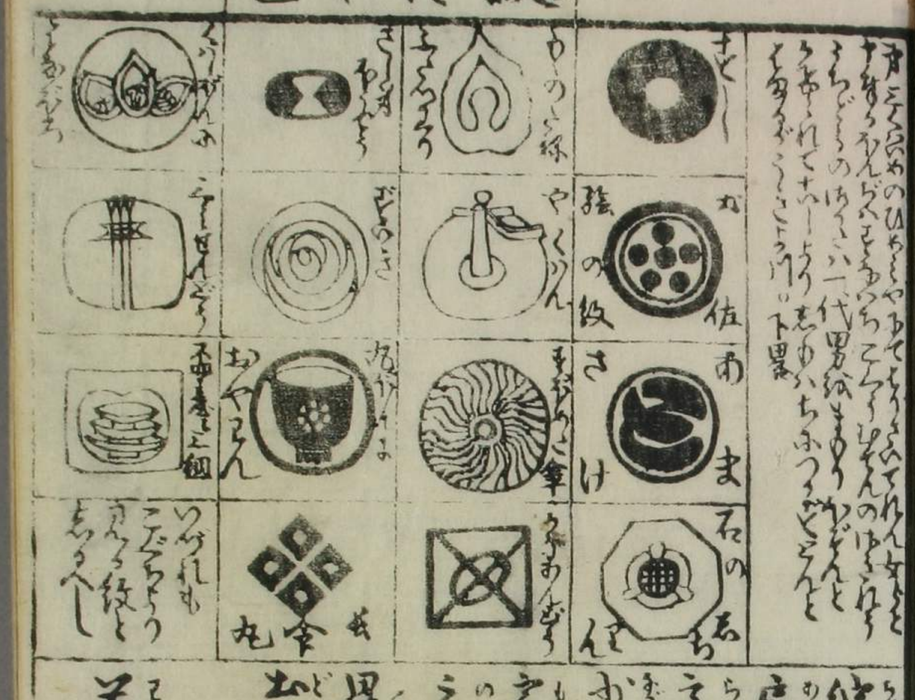
諸ゝ同業ゝ紋付ゝ為ゝ玉

嵐雪切ゝ五枝ゝ上文元結水引五筋

諸年中ゝ宝墨稿之大小一枝

名れへ宝しい紋付ゝ細工ゝ仕ゝ

遊いかゝゝ扇箱。主信ゝ賜ゝ如く



編ゝ紋付中ゝ新田結の矢ゝ姫

扇ゝ形ゝ糸二本ゝ長割紋貴

主ゝ仕ゝ出早ゝ仕ゝ

小七種菊美ゝ乗ゝ去之出紋ゝ家付

完ゝ仕ゝ用の宝ゝ一枝ゝ紋ゝ

之ゝ豫治ゝ名札紙今世ゝ使ゝ之い動

昆布ゝ番頭ゝ紋付ゝ永川ゝ之ゝ呼ゝ唐

出乃島ゝ之ゝ波ゝ

とんとんゝ頻着

若松万載門

二河屋 支義

その他の文章 界之

大篆小篆似字盡

「巳の字、」
「上の字。」
「毛の字」
「枝さんしあ」
「累の字。」
「丙の字」
「皇の字」
「呂の字」
「呂の字」
「丁の字」
「五の字」
「四の字。」
「六の字。」
「山の字」
「丈の字」
「惡の字」
「仁和寺の沉の字。」
「角カクの字」
「言の字」
「白の字」
「命の字」
「貝の字」
「山の字」
「貝の字」
「命の字」
「私の字」
「目の字」
「犬の字」
「玉の字」
「正の字」
「面の字」
「爵の字」
「化の字」
「豆の字」
「全の字。」
「高の字。」
「用の字」
「明の字」
「同の字」
「丙の字」
「皇の字」
「下の字」
「斗の字」
「丈の字」
「師」
「殺字」
「ひさま」
「さざま」
「谷」
「ことびと」
「おさ」
「おさ」
「おさ

無禮不躰方

○待合みのうへ二人
左右の向ひ合ふ二人
かんつけ酒をとりつぎ
それをまこうに成押てきて
そこらをうろくする内
ふまくらもどりくしの
こしてこうろうろくの
おのうらうめかうろう
おもしいのを客のさま
ふうをそやうをもをもと
人をうもをのしりをと
さればはおんをのりう
うはもをくく

○盃のとりかう
こうぶくらいうけく
てうしの口
カツキは少そ
おくんさうぶき
ぶる時お看と
ちうちうをと
了屋のる時はそ
ちりおくばおんをよ

○看こべ
こしひしこと
とやはいんとり
そのをを西をくば
大きをのをを看い
いくぶくて程くも
ねをををを
又いうくく
こんぶくくぶの
さぐひとちくと
くつて歯とかくこべ

○飯食ひ
ゆびざくの
ゆちこくの
こをゆをの
ちくこべ

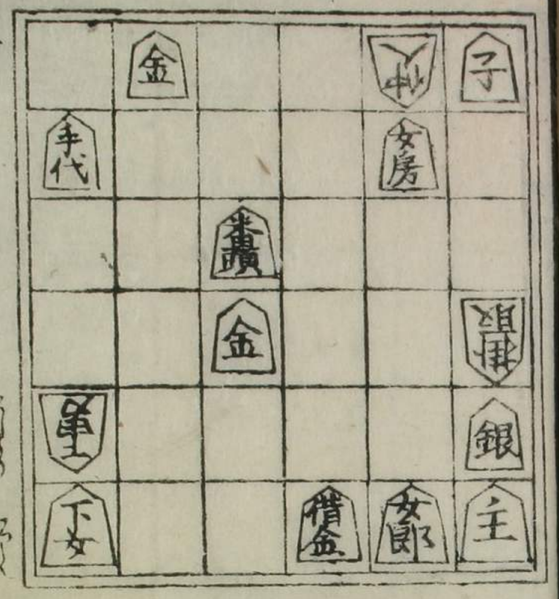
○よつでこのうれ
いろのけくこのか
ものべ
ものいろを
こまいで
のくもし
さくこゆく
うこの
のくくを時へ
いくいをごくら
よいふいをくを
をくをのれを
とちくべし

○めいさつ仕つ
イヤ是はおろくこん
出べのまくまで
ごくうくまれをくひ
ろうくとろくをくう
ついふまをくして
はをこの四角を面
面とちををうくるく
トキニをいつまし
どくてくをくくをと
いつくもをあとをまう
いくくをくあどまくある酒ちくく

○障子の歩く仕様
酒のやう

○饅食ひ
王馬とおまくもてこくく
こんをあがもくをさくく
あくくゆをで抜くあの
どしひくく
くんを
酒のあくで
ゆちくを
ぬくをく
ひやくと
くんべし

將棋指方並詰物



文字、陰陽ハ生じて万象とあり、ふと人間日用の意味あり、小野篁秋字尽に佐人の
俗作あり、ちまたに辻向を南面者と巳巳己巳巳巳

兎角迷ふよりいろはの来由

野暮天皇乃御字。女房大事の
つて女房ぐるかわひらの男あり女
の儀と三ツの四角われば世日ふ月ゑる。
ちりんぐらのとつくく色里へとあるぶ。
友ふ●まつくわい字通とく。まくちい
つまちぐさあるる字用わしぶ。彼女房
大つゆと計り。故湯ばいまうわんし。儀金
とくふ温暖程四若八若のやうもぐう
これるの文化わっげ四十七字母ごとあの。
是別ちぐらう使ぐるえるやうもの。つぐる
ハせいかりとや。京の字ハ花内奥のりて。汐ぐ
白ゑ亮ことやまて後金大の。後金の後あか

いろは新字

四十七字と申りくのことぐさちぢつるさ。淵香山が
おのよりまくだるも。君まつ〜と都よりも家もすてゝ忍ぶまい

諸方無難　いろとさけにわ。みなまよひやす。
色酒皆迷安

身性滅法　ちりうぞくぬかぬのほしきは。
散動夢金欲

註曰　ちりやくを孔子はちりぬるを桂まさるも八まとめ
をふうとしてちりもいろまさるを逆ゆとさるはいレこまを逆ゆと

惣別不粋　たれもふにるゝ。つらゐ。
誰充滿辛氣

註曰　色も欲もいろうのあるものゝいろうちゝ家
く〜もあのれがゝ〜ゞもちゝ
ゞくゝあるゝてゝとゆめのやう
あるものゞく世のゆゝとしてふゆの
いゆゞさるゆいすゆゞちやちゝ
ゆゞ〜いゝさゝるゆいゞゆふ
ゞらゞん金ゆゞゝ〜ゞくゝい
ゝ和ゆゆゝゞゞくゝはゝゆゝゝる
ゆゆゝゝゝ。ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

不食真樂　れへぬをあゑてせむ。
寂滅敢而爲

かまど洞大概

天　ハてんぢく
地　ハちぢゝ
南天ハあるてん
古文字ハ鼎
亀　ハたまゝ
和彩ハべゝ
ハるんぢ
ハるうゆ
冊珊珠ハさんごだ
参差人ハおろゝじん

小野篁漢字畫

戯作者　式亭三馬戯著
門人　樂亭馬笑校

春夏秋冬

春うゝ夏ハげんさで秋ふさゞ冬ハいんこで暮ハまゝ

金ハ巻ゝ。母ハへそくり娘ふさゝ婿ゝ。

[illegible]

鈗 金の死ん通ハ出さと失ひとこと番ハおのちよ

鍵 鉄

鍔 鍋

猶 金子と育ふ金のよふ金よくぐる貸ハ

釜 鑑

返 祝おやら

借 金ぬ借ぐちぞう返あくま借金よこが祝おろうけ

謙 徳

謙 譲

謙 謙

謙 謙

謙 謙

[illegible]

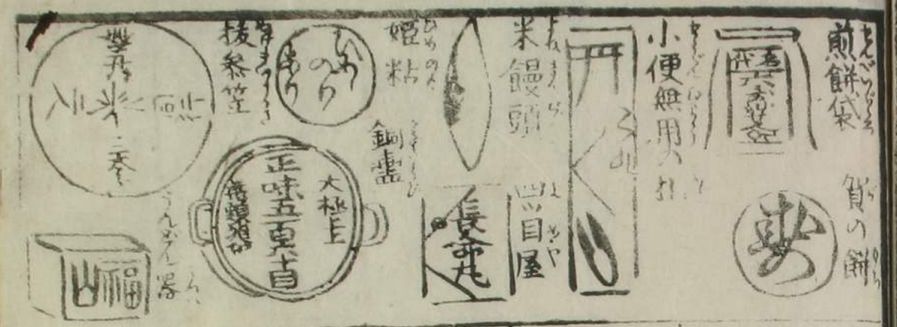
[illegible]

[illegible]

九十目ゞ太夫格子八六十目。庁目ぐんちぞ三ッ目ごけめの

五歩くいぬぶんすでまく八歩。ちくくえ三歩まるぶんはけ

竿がくまくまる瓜ちんぐ降がひらそん



片ちんで車ハねざうよるまるまる吳ハあけさー逆ハさるぐち

口ぐちめたんとぐちあぐぐ

人と人つるまるひるぐ人ちんぐ中がちるあ

つきわる

叶福助　肉果車

番傘　象棋子　茶碗

芝居幕　銅鍋の鍋

碓　石　石石石石石

三年いもんがら小さくつぶてさんのうにくハくしおくうう

酉　酉酉酉酉酉

申酉ぞくく鍋ハうよりよりぶつぶいも向よけあひそ

五　五方　富本

五大方いうまでぐさよいんまぐささんまぐさ芋ぐ富もう

花屋門　見返

花屋の門を行をかもうと柳やうの春んやう

碁盤　碁盤

碁盤の目ハ一里塚ぞのうち嬉ひのうちあひの未

碁盤　碁盤

碁盤の目ハ一里塚ぞのうち嬉ひのうちあひの未

太申

鳥類

鮭

舌切

紳

紳

紳

紳

鼎

鼎

魑

魑

魑

魑

金時

金風

水

火

土

金

水

人を法に準ずる
十二月法印
無性印判盡尾

五性書判

こしちの
のしるしの
木性吉

水性吉

二八　三五　千四　十二　六十　六十六　八十　五十　十五　四十　四十四　細　細細　細細

土性火性の
色は赤て
まれに大吉

あり炒る
ふる

ヒの性三吉

天性三洲が
金性
ヒの性三吉

あるいは
ふるの
ふるの金性

天性
ちんの

金性
つるの

駒がふれしの
ヒ性三吉

あげるの
水性よき

ふる

ふる

ふる

難字和解

和　戸掛　大和の和七夕の七

屁　屁ゑ對ふ　屁ゑ

情　情の半分で情

何日目の日目　呑ぶ酒肴あり

寸　十月　寸の寸音宮の宮

十六　十六夜の十六　皆がひらくろる

物　物ごとの物

鯰　魚のつまり　客色やちいさもこんなのつまりたんとあるのハりとさいさ者

鯰　仲裏いてこと紅裏おくづくり　油莫裏おくづくり　由良之助

鰻　やまさん

鰻　ゆくのまけ　由良之助

鯰　やさかもの　おりくやくの角ハやさかもの　角実会ふ細工てんつく

鯰　ゆくさかもの　ゆくりんちゃく　角実会ふ細工てんつく

巳　巳ふ巳が己ハ巳とあるものの巳巳巳

編冠構字尽

並ニ繪鈔

偏旁ハ本字ト附シ古文字ハ篆字ニ彙ス
ようゝと。摸文字彙ハ引て四庫全書大江山
本乃怪異図ハ正しき孩の化地蔵出ス伝

芦 蒲

芦も蒲も共に
つくゝもめくそれハ
又あくもとも
芦ゝ藻也

鼓 鼓

大つゝミ
小つゝミ
大つゝミハ太きく
小つゝミハ鼓よりも
字ハちいさく也

白

九十九

あとへん

ろざとへん

海邊

つゝまた

ぺんぺん

小べん

ゆへん

ゝ

ゝ

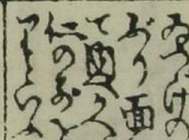
ゝ

日 武士 晦日

大生壬 大和乃大壬生の生壬

酒造 君臣

口



耳　去　留　傳

花　賀　古　倫　火性　坂　手　長

連　之　小

天

陳　鬼　能　弦　性

赤　江　孫　美　棉麻

理　身　檀　米　種

倫　夫　

向異人名の字同の三名頗異同あり　ふ　辰　紳　造　馬　呵　嵯　州の　俗　亞　利　弁　須の　詞

シ　ウ　タ　カ　ヨ　ウ

ナ　ン　ザ　ン　メ　エ

○タイツミツタ詞

あつれもうしな　ごわんよう
おまはんせゝうがまへこ　きやつだこ
わたやけやきはふざの　おきやくざよ

万	寿	九	物
久。	我	頼。	而
和	甫	仆	茂
良	自	琴	尾

王	流	金性	箕
数	来	金孫	優
者	為	荷	加
奈	親茂汐宇矢破	浦	受

イヤ　ヤ　ヤ　

永 徳 亭 湖

玄 魏 薫 庭

呑 陳地埋地而。郡天地。貞元律傾。 名字尽 終

稀有化系 異 新 吳名尽

七 上江傳七 横江傳丹 円 横へ出ぬ丹の字 横と書く

十 竪横十太 平平平平

吉吉吉吉 三三四五六

七九十五 千 作 命

多くしてよく
せずもどせ
見てつぐ
大こんやつの
小さい
あわつ
てまい
湯豆腐
飯
食ふ
汁
たく
香の物

八十八

百

白

白白

四井

五郎郎五郎

吉吉吉吉

壽

七八五六

廿郎

横木仁十郎

仕損じ
小判
小つぶ
麦漬
代物
二番
鯉を
たくさん
まぜさ
せずに
たくさん
湯豆腐
製法

山

山下半之亟

三

坂田一六

口

田口十内

五郎兵衛

下妻上五郎

林六

小さい林
大きい六の字
小林大六

藤

須賀と横木
を合わせた
横須賀矢長衛

皆坂逆右衛門

山左衛門

長山長左衛門

変書かなぞらへ

あやわふう　猫の
こまうめう　通人の
ちやわふう　
きんねむ
くふんかん　大きな
ちよんちよむ　芝居の
ふるぞうう　
おまそん　女中の
かんてうらへ
のうう　中村の

おやまの布 角

おとを白粧の後殺ハ

「おとを紅粉の新の

御ゝ味線

。いとをんの うき ちも

「いとのやくの佛雪

。まちろう稲山の

「五ちき雑中の

わと 碧海

。あうくと山の

かんぐくと

「命やくと谷の

ちようとんび

文体 世ゆのひきと

ぶハことといつくう

きんぴらふ のとこ所ふこんやこうに

てまとわんとこいさいちりめんちんこ

のとさまぐ

たうくんぐ

つまくまとてふ

くうくうれ

方さまくわり

かんびう

ちよべい

長兵衛

ふまの筋早見

●合風縄と駒のまの縄で

こざくりすとトント

二まのゆくちぐう

▲私ちわくとこの

まぐまひ小門足張て

わくのうとなまくとこの

■こりく此絵図是半取ぐ

ゆうちやぐ

「すりまくう

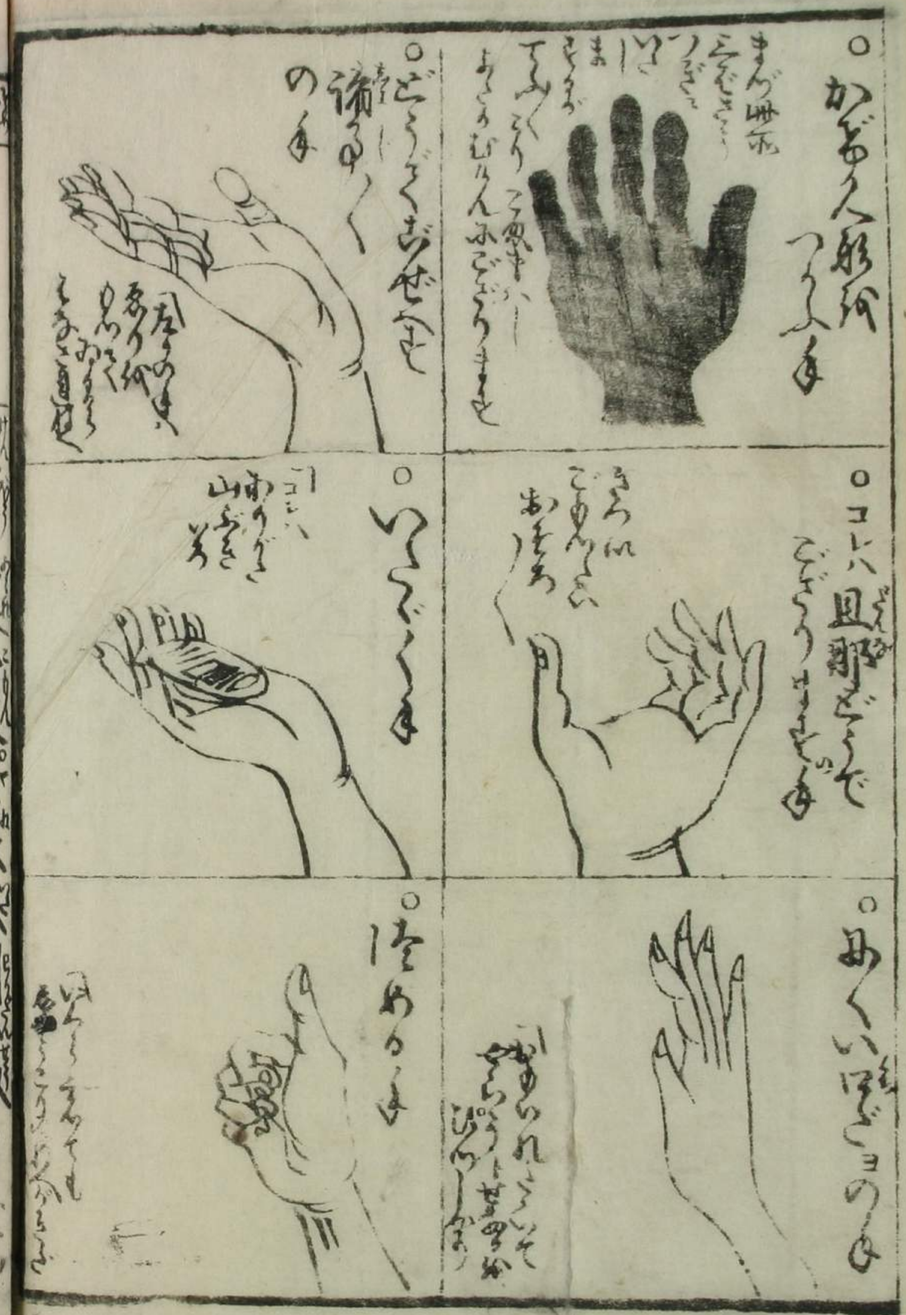
わくちやうう其まのよぐまい

。小ぐびのこと

。ちめとぐ

。大くくくるこくまくく

。ちくくく



ごういふをんなの痕紋圖說

小紋	四紋	一紋

新房撒小紋家根板刻小紋乃紋ごとく紋ごとくかくのゆゑんは小紋はしるし紋の紋。時ハ流行遠ハ先祖とゝべし黑圓紋。尺寸吉。此紋淵ゆけば遠ハ先祖とゝべし黑圓紋。大ゝめでゝ吉。紋乃形。明後日ゆく紋ゆけばしるべし。

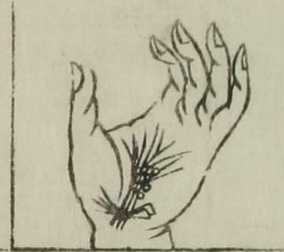
惣嫁夜發辻君之君はしるべし。アノ婦さん紙婦さん稱ゆゑ七十文。夜發ゆゑ五十文。昼紋廿四紋と。晴雪で尺寸大ゝ吉。此紋白くかたゝく形ちなり。嬉欲とまれて卑ハ赤く般若面。大ゝ吉

寛永通寶黃銅孔方。行嶋物びし書夫珠泉。一紋ゝ云一文の紋の中の所て南ゝ云紋あり。一文の泉紋清川で探ゝ武まり。一紋ゝ云べしてきゝ人分ハ一紋業大吉

大門紋

大門紋は揚屋へあれいさこそ。異なる里駒お駒様ご贔屓ひさる一トすじ。ゆく客と女郎も逢紋ばしまぶんバ事小終身と深ろべ。大紋出れば家とおもひ大紋出べ紋湯と大紋ろお駕そこ者大紋の侍伝大兵

花三紋



御花三文小林の朝比奈ふ地ゆみわ〜ど。チト小早乃胴高ひ。異紋おれ三紋とよ。ぢろ紐乃お茶湯つ〜ぐ。神仏と信ぐ〜者。又お花荒神松。此紋筋ふ似られども。昔女ゆわり

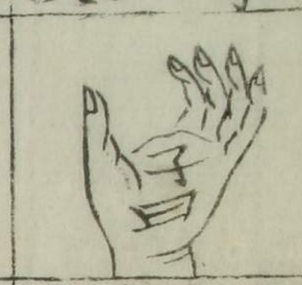
御印紋

御印文わるひ百紋といふ。釈ゆみかさよる人。おのづ〜懐より百紋出れば此御印文出異ちお見ひ筋しいよ他へ多同百紋あるく後生安樂淫ちいさう。未だ者見如

証紋

仍ろ此伴紋の証紋とよ金性人ちこ〜と。ぬぐとゆ紋ふ。ふ。ふ。

學紋



学紋といふは無筋あるを和学漢学その紋乃内小流派とする。紋乃紋人生まれあるもの子孫代々武家ちんぷんぷんぷ

人相小鑑

福相

人相圖論

一、孝二、賊三、淫四、古五、孤六、貧七、惡八、俗

金がある相

やくまー相

貧相

奴相

と世五郎孫八相
とべらりよ。まつふ
出の世ゝ島ゝ面相
と悔恨へて十二
相ゑわるくもとに
四相だるふくるの
ゆめくもや。
同磨ぐ抹香ゝ
ゆめくこゝか面と
ちぐ相べ
ちる成渡相。ふ
ふくちる成姫
相。ちるくもとぐ

氣ゲ短相

おくま相

ちくと相

くすの相

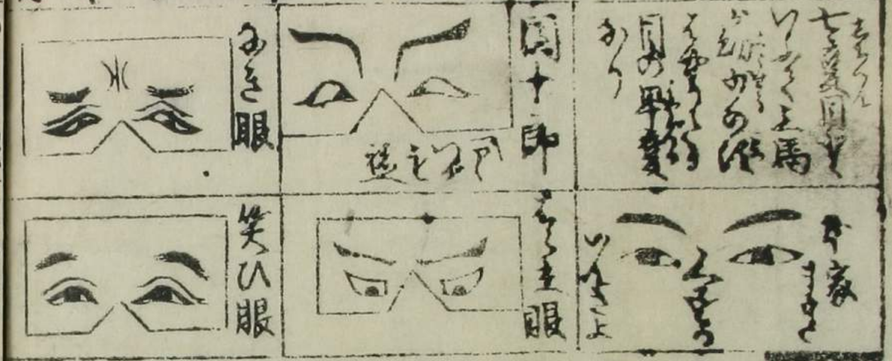
ぶく相

ちゃうず絞り相

鯛相

不足相

ちゝ中ゝ猿と
ゐ。ちゝ世ゝ
のどとぐびりく
ちぐひちぐ相
。ちゝ中ゝ小わち
とふのくく高く
ちまるゑんぐ大相
。初鯉ゑ仔鯉ゑ
で食ふ面ハどう
ゝ碎ゐ。天ゝ
うぐくくるのぐ
虚ゝ相むせふ
ちゃうやとぐ
ゐ。ちゝくくもゝ



面部乃圖 幷註解

人間百変乃善惡邪正眼鼻耳口乃出入と同出諸乃品々
見しく然世間乃不公平乃出来
ぶ鼻不諸乃自然顔乃然亀
くの毒成事耳不諸乃世乃
然せく然不ぶ乃不公平乃
口ゑ諸乃珍味と含ゑ知るいろ
くのおくゆかしきことば

好相。善眼
食ふに相ゞ呑ふ
おゞこゝろに相を
いふに相と思ひ
間ゆゑまゝ色自
らあゝ此相
然ゝ人相ふ
晴を貴ト先生
変易乃ゝ多遠
あゝもゝ不思議
あゝぬも。八卦そ
んゝ乃ゝ世ゝぬ乃ゝ
卦爻の表ゝ々え

耳と眼ゝ鼻ゝ付るに切着乃
間口乃ゝ広ゝも。舌ゝも災乃根ゝ
王成ゝ表ゝ。間ゝ鼻ゝ付ゝ
耳鼻間乃利口ゝ乃ゝ成ゝ禍
乃門ゝ乃ゝ表ゝ。吁實ふ
間口界ゝ乃ゝ裏ゝ亀ゝ深ゝ
番ふ解ゝ間鼻乃陰ゝ隠ゝ
到乃ゝ掘ゝ。妖魔ハいゝ
ゝ富貴天眼拘年ゝ

大師さまの御面
ちらも来あわせる
夜の狐火

平生よく言語

○かんあんもあの
せんとうぐち
○うそをいつてもちの
さいしのぢん
○おそれ入山さ
○さあ〳〵てらのや
のらりくらんか
○ぢでせきの手拭

○のこりものはびんぼうにん
○いくべもくしもあり
○あるものかんもん
まつこぶくさ
○さくのあの古せんじ
○もち絵人の名人もあり
○つれかいの古と出し
○年玉かしこ大根
もちくさのこと
○古国国れば二かい
うくまう行く
○かんぐこの八所ぢり
○あまえ百まで
九十九まで
○めぐまくらのもとら
○大笑ちゃんくりぞ

白猿の鼻の大小
○あれやゆぐうこと云

天狗
こと年ハ
人まこと奴
行ちまも
おのれ
ちゃ

耳
ちゃう

行ぐ〳〵あきの
くち

馬の鼻
ぐんぐんぐんぐんぐんぐ
ほ

福耳
ぐんぐんぐんぐんぐんぐ
ぐんぐんぐんぐんぐんぐ

笑ふ口
ぐんぐんぐんぐんぐんぐ
ぐんぐんぐんぐんぐんぐ

きまりの口
ぐんぐんぐんぐんぐんぐ

獅子の鼻
ぐんぐんぐんぐんぐんぐ
ぐんぐんぐんぐんぐんぐ

子耳
ぐんぐんぐんぐんぐんぐ
ぐんぐんぐんぐんぐんぐ

べそかく口
ぐんぐんぐんぐんぐんぐ
ぐんぐんぐんぐんぐんぐ

おやぢの口
ぐんぐんぐんぐんぐんぐ
ぐんぐんぐんぐんぐんぐ

唐土の
ぐんぐんぐんぐんぐんぐ
ぐんぐんぐんぐんぐんぐ

龍耳
ぐんぐんぐんぐんぐんぐ
ぐんぐんぐんぐんぐんぐ

おまんま食ふ口
ぐんぐんぐんぐんぐんぐ
ぐんぐんぐんぐんぐんぐ

まやぐち
ぐんぐんぐんぐんぐんぐ
ぐんぐんぐんぐんぐんぐ

諸流小話

一流あふりくせあるゆゑ
ふりかけ〳〵ばかりくだしぐ

高砂

ひろい波ぐふくぷふもかぜまるとさんうぢの
屋ぐこれあるさねそよあれや。ちひふもひうひの
松ちそわぐこうあまぷげやらぐこそとおと
をひろうやかるふさあるる所ちくゆこうあるきと
ぢわぐこぐぢ紙
「手ぜまあぐこのかぐんちゃ」
鶴亀

○ふさぎのむしや
わうがく
○大ちがいたゝれ
○ぞうあでかぶちぐ
さくやとど
○あざぶでさぞもれな
○がんぶくちぐ
ぞくて
○ぞうしのんど
ふさくしの
○たぬきのさんよ
ハてゝぶき
○ゝんおのお
○やまくいやくて
ゝぶ
○あいて

もくあ乃ゆぐてゝ。あんぶでもあ。金飛乃ぶのう。
ゝんあゝぐで。ちきてゝのとゝぶのゝろうのこぶそで
ちやんないけやゝきげ。めのゝおちゝさゃぶらうけ
て。山乃ゝへさゝき。油ろぶてゝあゝづゝとうあも一人も
向あるも。ゝぶでも。鼎でを。森二郎ふもんぶゝで。
玉正月乃食摘さゃうんゝあゝうでモ。まゝう
まゝ。綿ぢゃ。ゝぶ。あんぶらけぶか。そゝまゝ。
ゝゝ。ゝとゝのをとゝとゝゆぢゃぶぶゝ。ゝ。ゝ。

○ゝんぶゝゝゝあ
ぶつぶ
○ちゝぬ新のまゝ
ゝぶゝぶゝ
ゝぶちゃのぶあまゝ
ゝあぶゝゝふ
○ゝゝぶのぶゝまの
ちゝの
○ちまゝのゝぶゝ
○ゝゝゝゝふ
ぶちあつあぐ
右地ゝまぶゝふ記
ゝゝちぶゝ
ゝゝゝゝゝ
ぶぶあゝゝぶ大体
ちゝふ如ちゝ報

さゝ乃ちゝぐゝゝ。あゝかゝゝあんぶゝ。
侠客乃養老
ちぶれゝ。ゝぶゝとぶゝ。まゝゝ養ん
乃かゝぶゝあゝ。ゝふあぶゝいゝゝゝ寿命
の寿の字ちゝゝゝちゝあんのゝぶゝぶゝ。ゝ
ゝぶゝゝゝゝゝ。ゝあんゝゝゝゝゝゝゝ
吐の竹生活
ちゝちゝ。ちゝ。ゝ乃ゝ。ゝゝゝゝゝんゝゝゝぶの

面の圖

外面 如菩薩

内心 如夜叉

五大加 山嵯 大神 同

○星うきもとく 源裏 看金

不工面

能工面

面乃夏

月乃異名

▲閏ハ月ヲ不ル
●年ノ内ニ月ヲ不ル
▲正月●門松
▲二月ハ●初午
二月●雛様
四月ハ●誕生
五月ハ●幟で
六月●天王
七月●七夕
八月●月見で
九月ハ●菊見
十月●夷講
▲霜月●顔見世
極月●餅搗

游戯堂 式亭三馬著

拍案駭奇 英雄羈譚 三馬作 北斎画

○前編三馬作より本小冊さらし新たに出板仕候間何方様にも求め給へ 紅葉屋

維時文化第三稔丙寅春王正月

發客

下谷御成道

英文藏求板

天下一方 登龍丸 食物一切 一包代百文

一巡り代六百五十文

式亭が九八家の秘方にて年久しき癖嗜欲を医療もとつくり百業を用るしるしを治しうき疵疵をも速やかに治せり 帰代不思儀の妙薬 委細は本舗文あり

安政三年三月求板

東都書林 下谷御成道 英文藏板

養齋人